たかさご史話 66

～赤鉢巻き事件と河合義一（三）～

○河合義一の思想と行動

（その一）

この赤鉢巻き事件の指導者が当時、東播連合会会長であった河合義一でした。河合は一八八二（明治一五）年、高砂町今津に生まれ、東京外国語学校（現在の東京外国語大学）卒業後、日本銀行に勤めましたが、病を得て帰郷、以後、農業や牧畜業、商売で生計を立てていました。

さて、尋問調書にある河合の答弁から彼の思想の一端を見ていきましょう。

河合は予審判事から思想について聞かれ、「私の思想はキリスト教であり」「キリスト教が基本となって」おり、「鈴木文治、杉山元治郎とは親交があって、杉山氏の思想に共鳴して居る」と答えています。

日本農民組合（日農）加入の動機については、一九二二（大正一一）年、「杉山氏と賀川豊彦氏が印南郡中島へ演説に来られた時、演説会場等の世話をした」「その時同人らを知り、その後高砂の農民組合に入った」と答えています。これは同年四月二八日、印南郡中島支部結成の講演会が開かれ、同日夜には、河合率いる同志会主催の「労働問題小作問題演説会」が公会堂でもたれ、賀川、杉山、行政長蔵が熱弁をふるった事態をさしています。このとき、聴衆は三千人で高砂開闢以来の盛会であったと報じられています。そして、この時が河合と賀川・杉山とのはじめての出会いでした。ちなみに、同志会とは高砂町を揺るがせたいわゆる「水道事件」における反対運動の中核的組織です。

つぎに農民組合の主張は何かと聞かれて、河合は次のように答えています。

「農民組合は農民の生活向上、改善及び知識増進を計るのが目的でありまして、…農村が疲弊して居るのは…生産が少ない為であろう…地主と小作人との問題についても小作人が地主に払う可き小作料が高く、且つ安心して其土地を愛する事が出来ないのが原因であろうと考えて居ります。…

私は全国の農民組合では未だ企て居りませぬが東播連合会では先ず消費物を安く買うことが必要と考え、共同購入販売等の事業を企てて居ります。」

「小作人が安心して土地を愛することが出来る様にしたい」とはキリスト者河合の面目躍如で、「神を愛し、隣人を愛し、土地を愛する」三愛主義は賀川や河合らの根本思想でした。

（市史編さん特別執筆者　小南浩一）

◀「尋問調書」（大原社会問題研究所所蔵）